

「まっすぐな道」

～サウロからパウロへ～

使徒 9 : 1 - 20

■ 死があるから生が輝く

1. 杉原千畝(すぎはら ちうね 1900年-1986年 日本の官僚、外交官)

映画「シンドラーのリスト」をご存知ですか?シンドラーという人物はナチス・ドイツに入り金儲けに走っていましたが、アウシュヴィッツ収容所の姿を見ていくうちにだんだんと考えが変えられてゆき、自分の会社をおこし、そこで得た収益をすべてつぎ込んで収容所の人たちを一人一人雇っていき、何千人という人がアウシュヴィッツから救出されていきました。

杉原千畝は「日本のシンドラー」と呼ばれる人物です。千畝はパヴロフ・セルゲイヴィッチという洗礼名をもったクリスチャンです。パヴロフとはパウロという意味です。サウロがパウロになったように自分もパウロのように生きるのだという思いでつけられた名前です。また、千畝は自分の名前「ちうね」という発音がヨーロッパの子ども達には発音しにくいという理由で簡単に発音できる「せんぼ」としました。名前を変えるなんてすごいことですね。

第二次世界大戦中、リトアニアのカウナス領事館に赴任していた千畝はナチス・ドイツの迫害によりポーランド等欧州各地から逃れてきた難民たちの窮状を見ました。その時自分が救われた時に聞いた「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」というヨハネ 15 : 13のみことばを思い起こし、その日から不眠不休で1ヶ月の間避難民(多くはユダヤ人でした)を救済するためにビザ(通過査証)を手書きで発行していきました。この行為は外務省の訓令に反するものでしたが、千畝は書き続けたのです。やがて千畝はロシア軍に拘束され連れて行かれます。けれど、駅のホームに群がる避難民たちのパスポートにギリギリまでサインし続けたのです。そして、6,300人近くの人がイスラエル、またアメリカに帰ることができたのです。

日本に戻った千畝は命令に逆らったとして外務省を依願退職させられ、それからは職を転々とする生活となりました。また、奥さんの妹が亡くなり、長男も亡くなり、貧しいギリギリの生活を強いられました。晩年、千畝は「自分のあの時の選択は正しかったのだろうか。」と悩みます。そんな時イスラエル大使館から電話があり、大使館に呼ばれて行きました。すると、一人の年老いた男性が待っていました。その男性は千畝がビザを発給した当時訪れた避難民の一人だったのです。その男性は言いました。「あなたのおかげで今や3万人の同胞が生きています。ありがとうございます。」と…。千畝はビザを発給していなければ生涯悔やんだでしょう。けれど、その時にした正しい決断がこの時を迎えたのです。

千畝はイスラエルに招待されましたが、80歳という高齢になっただけ行くことができず、代わりに次男と四男がイスラエルに行きました。彼らが入国したその空港には大勢の人々が待っていて次々と握手をしに来ました。息子たちは千畝に手紙を書き送りました。その手紙には「お父さんの背中をみて僕たちは生きていきます。大勢の人達が私たちのところにきて握手を求めました。あなたの生き方がどれだけ素晴らしかったかがわかりました。」と書かれていました。千畝はその手紙を読んで涙したそうです。そして千畝は自分の人生が無駄ではなかったこと、自分はこのために生きたのだということがはっきりとわかったのです。

千畝はビザを発給している時に哀歌 2 : 19-21のみことばを思い起こしています。哀歌は紀元前にエレミヤという預言者が捕囚の民となっていたユダヤ人の状況を見て、ユダヤ人が忘れてしまったものをもう一度気づかせ、助けてくださいと祈ったことが書かれている箇所です。ぜひ、開いて読んでみてください。

今日のメッセージのテーマです。死を意識するから生が輝くのです。私たちは必ず死にます。その死にむかっている私たちが「今」「どんな人生をいきているか」が大切です。生き様が大切なのです。

■ ①あなたの道を離れよ！！

今まで歩んできた道を振り返ってみてください。自分の正しい

と生きてきた道がそうではなかったことに気づくはずで。けれど、考えることを失った私たちは死ぬ直前にならないとこれを思い起こすことができません。これでは人間として生まれたのにあまりにも意味がありません。私たちは「今日」考えられるはずで。自分の生き方が本当に正しかったのか、今の考えが本当に正しいのか、今やっていることが本当にふさわしいのか、自分に嘘をつかない人生なのか…。パウロは自分が正しいと思ってサウロとして生きていましたが、イエス様と出会った時にこれまで自分が正しいと思って生きてきた道がそうではなかったことがわかりました。そして、それまでの生き方を全部捨てたのです。だから「パウロ=最も小さい者」と自らを呼ぶようになったのです。パウロは語っています。「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとと思っています。…

(ピ 3 : 8) 私たちもパウロのように今まで生きてきた道から離れて正しい道に進まなければ、人生を自ら壊すことになる。聖書は伝えているのです。

■ ②大切なものが隠れた「したくない事」

嫌なことを思い浮かべてください。仲直りすること、ごめんなさいと言うこと…。私たちはしたいと願うことができず、ことさらにしたくないことを行ってしまいます。パウロも語っています。「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。(ロ-7 : 19) 怒ってはならない時に怒り、怒らなければならない時に怒らず、赦さなければならない時に赦さず、愛すべき人を愛せません。自分が正しいと思って生きているからです。しかし、その結果、自らの周りの大切なものを傷つけてしまいます。パウロはダマスコ途上でイエス様と出会った時、目が見えなくなりました。パウロはアナニヤのもとを訪れ祈ってもらえば再び見えるようになると神様に言われてアナニヤのもとに向かいました。アナニヤも神様からパウロが訪ねてくることを知らされました。アナニヤにとってパウロは自分の同胞を迫害し殺した人間です。パウロのために祈ることはアナニヤにとって「したくない事」でした。けれど、それをした時パウロの目が開かれました。パウロがいたからこそ私たち異邦人へ福音が届けられていったのです！神様の前に私たちがしたくない事を選んだ時、そこに隠された良いものが私たちの人生を変えてくれるのです。そこに正しいことがあるのです。

■ ③神の時を生きる

過ぎ去った時は二度と帰ってきません。今日、私たちがこの場所に座るのには意味があります。生まれたその場所から今日この場所で生き、あなたの家庭に職場に地域に… etc あなたが関わるのには意味があります。一時を見ないでください。時は毎日やってきます。そして今の種蒔きが将来に繋がるのです。今は甘んじて生きて将来はありません。そんな人が言う言葉は「何故わたしがこんな目に！」です。本当は振り返ればあの時の出来事がこうなったのだということがわかっています。そこに目を向けないためにそのように言うのです。けれど神様はそんな姿を見て責めるのではなく「私が代わりになるからもう言わなくていい。あなたの痛みは私が背負うからあなたの人生を喜んで行きなさい。」と優しく語ってくださいています。今、たとえどんなに辛い状況の中にあっても、病の中にあっても自分のために十字架にかかってくださったイエス様がおられることを忘れなさい。神様は必ず私たちを癒し、平安と真実を示してください。耐えて生きてそしてイエス様と共に正しいと思うことを行っていきましょう。まっすぐに歩んでいきましょう！